

4. COVID-19 感染拡大時の精神障害のある人や家族, 事業所

職員への影響と経験知の調査研究

○渡邊 奏子 (浦和区障害者生活支援センターやどかり)

萩崎 千鶴 (やどかり情報館出版編集部)

渡邊 昌浩 (やどかり情報館出版編集部)

【研究目的】

COVID-19 は自然災害であり, グローバル化がもたらした人為的災害であるとも言え, 今後も繰り返される可能性がある. 本研究では, やどかりの里の精神障害のある人とその家族, 職員を対象に, COVID-19 感染拡大により暮らしと仕事への実態と影響を明らかにする調査を行う. それにより長期間, 行動変容を強いられる状況下で, 事業継続性と精神障害のある人や家族, 職員の暮らしを支えるために必要な要素を導き出すことを目的とする.

【研究の必要性】

本研究の対象は, 公益社団法人やどかりの里を利用する精神障害のある人(以下メンバー)とその家族(法人内の2つの家族会, 以下家族), 職員(常勤・非常勤含む, 以下職員)である. 2020年3月のCOVID-19感染拡大による第1回緊急事態宣言以降, 感染拡大防止を優先課題として事業を運営してきた. その結果, メンバー, 家族, 職員は, 有形無形に暮らしや仕事を変化せざるを得なかった. やどかりの里は人と人とのつながりを作り, 自分の人生を取り戻す場である. 感染拡大防止策としてのソーシャルディスタンス, 移動制限等は, 本来の活動展開を阻み, 感染は防いでも社会的孤立や心理的不安が高まることが危惧された. 本研究では, COVID-19によってメンバー・家族・職員の暮らしや仕事がどのような影響を受け, この経験から各個人が考えていることなどを調査し考察する. 今後さらに行動変容を余儀なくされる事態に備え, 1人1人の「暮らしと生命(Life)」を守るために何を大切にすべきかについて明らかにする基礎的研究である.

【研究計画】

1. COVID-19 影響調査チームの編成と先行調査研究レビュー

本研究の代表研究者及び共同研究者に加え, メンバー(2人)・家族(1人)・職員(1人)を構成員とした調査チームを組織し, 外部有識者(2人)を加え, 先行研究・調査(「厚生労働省社会・援護局」調査/「日本財団」調査及び文献(雑誌「響き合う街で」/やどかり出版)等をもとに COVID-19によるさまざまな影響についてレビューした.

2. インタビューによる予備調査の実施

メンバー・家族・職員(各2人)への予備調査を行い, 聞き取りの内容をコーディングし, アンケー

ト調査の設計(調査項目・調査対象者・実施方法・実施時期等)を行った。

3. アンケート調査の実施

2022年6～7月にかけて実施。法人内各障害福祉サービス事業所別にメンバー、職員への説明、承諾を得た対象者に調査票配布・回収を行う。メンバーは調査用紙、職員はwebで回答。2つの家族会に所属する家族に対し調査の説明、承諾を得た対象者へ調査票配布・回収を行う。

4. まとめの作業

回収した調査票の集積、集計作業を行い、外部有識者の助言を受けながら分析を行う。また、調査チームの視点で調査の結果について検討し、考察と課題を導き出す。

【実施内容・結果】

1. アンケート概要について

アンケートは予備調査の内容をコーディングし、「Ⅰ. 基礎情報」「Ⅱ. 日常生活について」「Ⅲ. 労働状況について」「Ⅳ. コロナ禍での新しい生活様式について」「Ⅴ. コロナ禍で工夫してきたこと」「Ⅵ. 我慢してきたこと. 感染が収束したらやりたいこと」「Ⅶ. コロナ禍でのライフスタイルや価値観の変化について」「Ⅷ. 地域、行政、社会に期待すること」という8つの項目で設問を作成した。

2. アンケート調査集計結果について

メンバー、家族、職員それぞれから回収したアンケートを属性別に集計した。各回答には未記入者もいるため、その人数は除いて割合を出している。実人数は「n=」で表示。

1) 基礎情報

①属性別回答数(※登録人数は2022年3月末時点)

	メンバー	家族	職員	属性未記入
対象人数	331	51	95	1
回収数	250	37	80	
回収率	75%	72%	84%	

②属性別年齢層(メンバーn=248,家族n=37人,職員n=80人)

属性別年齢層では、メンバーは50歳代が85人(34%)と最も多く、家族は70歳代が21人(56%)と、親世代の家族が多い。また、職員は年齢層の幅が広く、突出して人数が多い年齢層はない。

＼歳	～24	25～	30～	35～	40～	45～	50～	55～	60～	65～	70～	75～	80～	85～
メンバー	0	6	12	16	29	40	49	36	25	13	15	3	3	1
家族	0	0	0	0	0	1	0	1	1	6	10	11	4	2
職員	4	2	10	6	4	14	12	7	10	4	6	1	0	0

2) COVID-19 感染拡大時の日常生活について

①新型コロナウイルス感染症についての情報の混乱(単一回答/メn=250,家n=36,職n=80)

「かなりあった」「あった」と回答した人はメンバー93人(37%)、家族15人(41%)、職員57人(71%)。 「あまりなかった」「まったくなかった」と回答した人はメンバー157人(63%)、家族21人(58%)、職員23人(29%)であった。

②新型コロナウイルス感染拡大で、日常生活は変わったか(単一回答/メn=244,家n=37,職n=80)

「大きく変わった」「変わった」と回答した人は、メンバー145人(59%), 家族28人(75%), 職員68人(85%)。「あまり変わらない」「全く変わらない」と回答した人はメンバー99人(40%), 家族9人(24%), 職員12人(15%)であった。

③心や体の状態に関すること(複数回答/メn=209,家n=35,職n=80)

全ての属性共に最も多かったのは「自分や家族が感染したら、人から批判や差別、嫌がらせを受けるかもしれないと不安に思った」で、メンバー144人(68%), 家族28人(80%), 職員65人(81%)であった。「感染が不安で感染した人が近くにいないか気になる」と回答した人が次に高い割合となっており、メンバー93人(44%), 家族16人(45%), 職員31人(38%)である。

④コロナ禍での人や場所などに関すること(複数回答/メn=191,家n=34,職n=80)

「友人など親しい人と直接会ったり、連絡を取る機会が減った」人は、メンバー115人(60%), 家族29人(85%), 職員72人(90%)と各属性で最も高い回答数だった。「人とのコミュニケーションの機会が減った」と答えた人も同様で、メンバー94人(49%), 家族22人(64%), 職員50人(62%)である。割合は少ないがプラスの要素として「コロナ禍でも家族や近所の人など日常的な付き合いに支えられた」と感じている人はメンバー67人(58%), 家族12人(41%), 職員23人(28%)となっている。

3) 新しい生活様式について

①新しい生活様式を実行する中で感じたこと・考えたこと(複数回答/メn=112,家n=24,職n=65)

メンバーの回答で最も多かったのは「感染症対策を常に行うことにストレスを感じている(以下「ストレス」)」71人(63%)で、次いで「感染予防対策として、オンラインで集まる形式は必要と思う(以下「オンライン」)」56人(50%)、「周囲の人たちとの感染対策への意識の違いに疑問を感じたことがある(以下「意識の違い」)」40人(35%)であった。家族は「オンライン」が最も多く15人(62%)、次いで「ストレス」14人(58%)、「意識の違い」10人(41%)である。職員は「オンライン」が48人(73%)、「意識の違い」33人(50%)、「ストレス」31人(47%)となった。

②生活の中で工夫してきたこと(複数回答/メn=245,家n=34,職n=80)

すべての属性共に最も多かった回答は「自分や家族の感染予防のためにワクチン接種を行った」(メンバー218人(88%), 家族32人(94%), 職員72人(90%))で、「感染症対策に不安がある場所を利用しない」が次いで多かった。

4) その他新型コロナウイルス感染拡大の暮らしへの影響を経験してきて、あなたが新たに気づいたこと、考えたこと、地域や社会への提案など(自由記載)※記載内容を分類し、以下に一部を記載

①メンバーの回答

<COVID-19に関すること> 「マスクと手洗いはしっかりする」など日常的な対策についての意見や、「正しい情報を知る」「感染対策をすれば活動ができる」など、感染症について正しく理解する必要性について記載が多い。

<日常生活に関すること> 「自分の生活スタイルを守っていた」「自分のペースで無理しない」など、生活パターンを変えない工夫や、「緊急時の生活保障」「孤独にならない支援体制」など危機的状況になった際に必要としていることについての記載があった。

＜社会のしくみに関すること＞ 「社会的弱者の対策, 支援のあり方, 社会の在り方を考えることが必要」「社会システムの見直しが必要」など, 障害のある人の施策に留まらない意見があった。

②家族の回答

＜COVID-19 に関すること＞ 「マスクに馴染めない人への対応」, 「(障害のある)本人の病状に合わせた理解の促し」など, 家族だけでは対応に苦慮しているという声があった。

＜生活するうえで大切なこと・大切と気づいたこと＞ 「人によって支えられ, 先に進む力が得られる」「高齢になっても興味, 関心が持てることに会う」など, 前向きな回答があった。

＜これから必要と思うこと＞ 「医療, 介護の人材育成」, 「不足の事態にも余裕を持てる体制づくり」など, 身近な医療・福祉現場の充実を希望する意見や, 「誰かに「しんどい」と言える場をつくる」, 「感染症への理解が進み, 人に寛容な社会に」などの回答もあった。

③職員の回答

＜つながりが大切＞ 「コロナによるつながりの分断」, 「困っている人, 社会的弱者が SOS を出せない」といった社会全体への危惧や, そこを乗り越えるために「吐き出せる家族, 仲間, 場所が必要」, 「働き続ける(社会とつながりが切れない)ことが大切」などの意見があった。

＜社会の抱える課題が浮き彫りになった＞ 「医療体制の脆弱さ」, 「精神科医療の問題」, 「事業継続の危うさが顕著に, 制度設計の問題点が明らかとなった」などの課題を指摘する声や, 「制度の在り方の課題を社会に発進するチャンス」, 「これを機に政策を動かすことができるのではないか」, 「コロナに限らず, 社会の中で弱さを抱える人の見えづらさ生活への影響の実態把握が必要」など, この機会を活かす意見も多い。

＜学習と知識の共有＞ 「知識の共有」, 「そのための学習の機会」, 「問題の本質をとらえる」などの学習の必要性や, 「発想の転換で視野が広がる」, 「活動の制限がある一方で新たな活動が生まれる」など, その先の活動の展開についての意見もあった。

【考察と今後の課題】

1. 調査の考察

1) 調査時期について

本調査は「第6波」が収束し, 「第7波」が始まる直前に実施した。「新しい生活様式」が謳われてから1年以上が経過し, 日々の感染症対策に馴染み, 切迫感が緩んでいる時期だったともいえる。感染が急拡大する時期に調査した場合とは, 結果に多少の差異があったのではないかと推測する。調査時期の選定には慎重な見極めが必要と考える。

2) メンバーの命を守るための情報共有と学習の機会の確保

1-2)で, 情報に混乱している職員は7割を超えていることが特徴的だった。メンバーの多くは糖尿病や呼吸器などの慢性疾患を抱えており, 感染した場合に重症化しやすい人もいる。また, 精神薬の長期に渡る服用も影響した体重増加により, 脂質異常や高血圧症などを抱えている人も多い。メンバーが感染することを防ぐため, 保健師や医師など専門職による感染防止の研修を実施し, 感染状況に合わせたガイドラインを発信するなど, 職員は常に感染予防のための行動(事業所の

消毒、換気、メンバーの体調管理など)を心掛けていた。そのことから、常に情報を敏感に捉えることが習慣化したといえる。「情報を正しく捉えられるようになったか」対し、職員の94%が「とても思う」「そう思う」と回答している。正しい情報を得る機会の確保は、混乱を抑えることにつながっている。

3) 人と人が日常的につながっていることの大切さ

1-2)④で、各属性共に「人と会う機会が減っている」と回答があり、最後の自由記載では、友人や家族、仲間の存在が重要だという声が多く寄せられた。更に精神障害のある人のみならず、社会の中で弱さを抱える人や孤立している人とつながれる場所や機会、働きかけの必要性が訴えられている。COVID-19 感染拡大のような緊急時には、日常的なつながりや暮らしを支える要素が備わっているかが、より浮き彫りになると言える。

2. 今後の課題

1) 研究会や学会等の機会を活用し、多面的な分析の視点で調査結果を見直す

本調査は2022年7月に回収し、集計から分析が必要と考える。研究会や学会等での発表を検討し、新たな視点で調査結果に対する意見を収集できるよう進めていく。

2) 歴史的・社会的背景から考察を深める —メンバー・家族・職員による協働の学習—

自由記載の内容を見ると、「精神科医療の問題」「制度の在り方の課題を社会に発信」「社会的弱者の対策」など、COVID-19 に留まらない意見が多数寄せられている。精神障害のある人やその家族が抱えてきた歴史的背景や、社会的弱者とされる人々が置かれた社会環境など、広い視野で本調査を考察する視点について見直していくことが必要である。本調査の調査チーム(メンバー・家族・職員)による協働の取り組みは、多角的視点で学び合える有意義な機会となった。更なる考察に向け、協働の学習を継続し、その意義についても発信していきたい。

3) 必要とされている資源や環境を創り出していく

COVID-19感染拡大時に限らず、人がつながることができる機会や場、困っている人や社会的弱者が SOS を発信できる場や関係性を創り出していくことの必要性を記載している人も多かった。前述した協働の学習を通し、地域の中のさまざまなつながりのなかで実現できることを具体化していく作業が必要だと考えている。

【経費使途明細】

使 途	金 額
予備調査インタビュー文字起こし (10,000 円×5, 12,000 円×3, 14,000 円×1)	100,000 円
調査用紙印刷代 (380 件)	9,440 円
調査用紙郵送費	6,052 円
書籍代 (『響き合う街で』95号 1,200 円×20, 関連書籍 2,750 円)	26,750 円
調査票集計作業 (400 円×368 件)	147,200 円
講師謝金 (20,000 円×2 人)	40,000 円
合 計	329,442 円
大同生命厚生事業団助成金	300,000 円